

宮沢賢治／文語詩稿「岩手公園」の生成過程

—— 自伝詩篇から社会詩篇へ ——

島田隆輔

1

一九三三（昭和八）年八月に成る定稿詩集『文語詩稿
「百篇」』に収容された「岩手公園」の過程について、三
二（昭和七）年以降の再編段階に起稿したと推定する下
書稿三の推敲現場から検討をしてみたい。
そこには三段階の現場がみえる。

まず鉛筆1による開始本文とその鉛筆1による手入れ、
それに対する鉛筆2の手入れ、さらに鉛筆3による手入
れ、という推敲過程である。その鉛筆2手入れ形に対し
て、詩人は鉛筆によって〈写〉の符号を与えて、ウル定
稿の1編に選択したと推定する。

そのうえで鉛筆3による手入れが、「写を避けて」
（新校本全集第七巻校異）さらにおこなわれるのである。
つまり、鉛筆3手入れ形は定稿清書直前にも想定される

もの、ということになる。それぞれの本文を掲げる
（「↓」（↓）は手入れ、連番号が付与されていない場
合は』で連の区切りを示す）。

▼鉛筆1開始↓手入れ 1稿とする

岩手公園

孤光燈イクライトは燃えそめて／「羽虫もはやく群れたれど
↓（ほのかに↓ゆふべを）しろくいらだてど」／
東はるかに散乱の／さびしき銀は声もなし
なみなす丘はぼうぼうと／青きりんごのいろに暮
れ／ひとりそばだつ高洞山たかほらは／山火の痕ぞかぐろ
なる

まひるを経来し分析の／酸のけぶりに胸いたみ／
わがしわぶけばあやしみて／ふりさけ見ゆく園つ

かさ
孤光燈にめくるめき／羽虫の群のあつまりつ／川
と銀行木のみどり／まちはしづかにたそがるゝ』

▼鉛筆2手入れ形〔2稿とする。〕(写稿)か

岩手公園〔1が残る〕

①なみなす丘はぼうぼうと／青きりんごのいろに
暮れ／ひとりそばだつ高洞山は／山火の痕をす
ぐろへり

②孤光燈にめくるめき／羽虫の群のあつまりつ／
川と銀行木のみどり／まちはしづかにたそがる

▼鉛筆3手入れ形〔3稿とする〕

岩手公園〔1が残る〕

①「かなた」と老いしタピングは／杖をはるかに
ゆびさせど／東はるかに散乱の／さびしき銀は
声もなし

②なみなす丘はぼうぼうと／青きりんごのいろに
暮れ／大学生のタッピングは／口笛軽く吹きに
けり

③老いたるミセスタンピグ／「去年なが姉はこ
ゝにして／中学生の一組に／花の名をこそをし
へしか」

④孤光燈にめくるめき／羽虫の群のあつまりつ／
川と銀行木のみどり／まちはしづかに「以下削

これをみると、その変化には激しいものがある。詩形が、4行／2連形にまとめられようとしていたのに、4行／4連形に引き戻されている。詩句表現も詩形も凝縮化に向かう《文語詩稿》の定型化の傾向に逆流しているうえに、「岩手公園」という詩の舞台に変化はないものの、異国から来た家族の突然の登場に驚かされるのである。

その詩の場がどれほど劇的に変容したか。開始形の詩語が変転してゆく過程を、手入れごとにあらためてまとめてみたのが、次に掲げる表である。(○は開始形とほぼ同文、×は削除、◎は開始形とほぼ同文の復活)。

開始形詩語	1	2	3
・岩手公園	○	○	○
・孤光燈の羽虫	○	×	◎
・さびしき銀雲	○	×	◎
・夕暮れの丘々	○	◎	◎
・高洞山の山火	○	○	◎
・胸のいたみ	○	×	◎
・わがしわぶき	○	×	◎
・孤光燈の羽虫	○	◎	◎
・街のたそがれ	○	◎	◎

岩手公園を舞台に、悩みを抱いた青年を遠近の外景をとらえるなかにはさみこむ、しかもその景物も青年の内景を反映させた、寂しさのただよう叙情詩として開始されたものを、鉛筆1手入れで「いらだち」にまで増幅させようとしたものの、一転、鉛筆2手入れによって削除を重ね(第一・二連)、「わが」存在を詩の舞台から隠蔽するのである。

公園から遠くの山河を眺望し、また公園のなかから近景である街のたたずまいをとらえて、2連構成の簡明な叙景詩を成立させている。叙情から叙景へ、そこに詩想の変質があつたろうことはまちがいない。そしてこのときたぶん、鉛筆の〈写〉の符号を与えた、と推定する。

2

けれども、いよいよ定稿化に向かおうとするなかで、この叙景詩構想は崩され、思いもかけなかったタッピング一家が、その舞台に突然加わってきて、詩の場は二転するのである。

盛岡バプテリスト教会牧師ヘンリー・タピングには、中学時代に英語を学び、高農時代には聖書講座に通うという交流を宮沢賢治はもっていた。「大学生のタッピング」はウィラード、一八九九(明治三二)年生まれの彼が大学生であるとすれば、一家が盛岡を去る一九(大正八)年に近い頃の記憶がここに重ねられたということになる。そうした詩の場を支える詩想に、さらなる変質

があつたとも当然考えられてよからう。

こうした変転の様相に対して、私たちは異国からの訪問者の登場のほうに注目しがちであつて、**2**稿から**3**稿に向かう詩の場の変貌ぶりに眼を奪われがちだ。しかし、後述するが、実はこの**2**稿と**3**稿との距離はそれほど遠くはないと考えられるところがある。むしろ距離は、**1**稿と**2**稿の変転のほうにあつて、それも相違な落差を秘めているといえるのかもしれない。そのことから先に解明してゆきたい。

下書稿三を再編段階の展開と推定しているが、そこに到達するまでの過程からまずたどっておこう。それは、三〇(昭和五)・三一(昭和六)年の初期段階と推定されるもので、〈了稿〉として成立した下書稿一とその展開である下書稿二とがいずれも無題のまま形成されている。

「わが」ことを吐露している第三連にしばつてその本文の推移をみると、そこには「瓦斯」や「分析」の語がみえるところから、化学実験や分析を学んだ盛岡高等農林学校の学生(高学年であろう)、あるいは土性調査とその分析に集中した研究生の頃を題材としたもので、自伝詩篇として当初はもくろまれたものとみられる(ただし下書稿二手入れのなかには下書稿三開始形に直結するところがあり、再編段階に重なる時期におこなわれた可能性もある)。

まひるを青き瓦斯の焰を／酸の蒸気に胸いたみ／
ゆふべはひとりこゝにして／きみおもふ日の数つ
もりしか
← (下書稿一手入れ形)

まひるは青き瓦斯の火や／酸のけぶりに胸いたみ
／ゆふべはこゝに商量の／むなしき日数つもりし
← (下書稿二開始形、×印刷除)

まひるを経来し分析の／酸のけぶりに胸いたみ／
わがしわぶけばあやしみて／ふりさけ見往く園つ
かさ
← (下書稿一手入れ形、再編段階か)

ここでは、まず「きみおもふ」詩篇として下書稿一が
成立する。「こゝにして」とは岩手公園のこととみてよ
かろうが、ただそれが「恋」であるとは断定できない。
年譜等によつてもその時期に女性の影はほとんどみえな
い(ただ、『文語詩篇ノート』の末尾索引メモに「農林
第二年第一学期 Zweite Tabe / 果樹園」があり、そ
の二度めの恋というものの内実是不明である)。

この詩稿には、一八(大正七)年六月の歌稿数首が関
連するといふ。すると、この時期の「きみおもふ」対象
として、たとえば、その三月に虚無思想を疑われて突如
学籍除名となり岩手を去つていった親友、保阪嘉内がい
る。また一二月には、日本女子大学校在学中の妹トシ子
が倒れ、宮沢賢治は母と上京し、看病にあたっている。

盛岡中学時代の記憶

高農学生時代の記憶

高農研究生時代の記憶

- ・タピング師英語教師
- ・法華経への傾倒
- ・タピング師の聖書講座
- ・保阪嘉内との出会い
- ・盛岡付近地質調査
- ・保阪嘉内除籍処分
- ・稗貫郡土性調査
- ・妹トシ子闘病

次の下書稿二段階になると、「きみおもふ」ことが
「商量」の日々へと置き換えられている。「商量」とは
「ハカラフコト」。考へワクルコト(『言海』、ちくま
学芸文庫版)で、恋愛の悩みの形容に用いないこともあ
るまいが、ここでは、盛岡高農卒業・研究生の前後に父
との間に発生した問題として、進路について家業を継が
せようとする父と、それを厭うて山師まがいの起業をも
提案する子の確執があつたし、あるいは信仰について、
浄土真宗の敬虔な門徒である父と、法華経を護持し日蓮
主義にも奔ろうという子との闘いがあつたので、そのよ
うな悩みであつたとみるほうが、内容としてもむしろふ
さわしい。

要するに、悩みを抱きながら化学分析にたずさわつて
いた青春時代を呼び戻し、その記憶のいくつかについて
「きみ」への思いや「わが」ことの内実を文語によつて
再現することで、あの頃の自分のありようを再点検しよ
うというのではなかつたか。いわば自分史の精査を果た

す自伝詩篇として形成されてきたといえるであろう。そして、それを承けて下書稿三も開始していた。それが、手入れ段階で自伝性の中核といえよう「わが」存在を隠してゆくのである。

3

①稿から②稿へ、その詩想に、どのような変質が起きたのだろうか。

「わが」ことを詩の表舞台から退場させることによって、私のいる「岩手公園」から、詩の場には誰もいない（逆に言えば、誰のものでもある）「岩手公園」が出現する。つまり、開かれた近代空間としての「岩手公園」が現われる。そして、そこを立ち位置にして、先に遠景をとらえ（①連）、後に近景をとらえる（②連）。

このように②稿に構築された詩の場とは、どういう意味をもっているのだろうか。それに応えるためには、②稿の詩の場が緊密な対構成によって構築されていることを指摘する必要がある。

夕暮れの岩手公園という場の大枠のうえに、遠く「みなす丘はぼうぼう」とあり、近くに「まちはしづか」にあるという光景の対置が、①連・②連としてある。そして、それぞれの枠組みのなかにある点景や様態が、およそ対応するように配置されているのである。もともと対比的な意味をもつとみられるそれは、①連結句の「山火の痕をすぐろへり」と②連の起句「孤光燈にめくるめ

き」とであろう。

「山火の痕」とは、春になると、山仕事や農作業の開始を告げる里山の山焼きあるいは耕地の野焼きをおこなった、その痕跡のことである。盛岡の北にある高洞山（五二二メートル）に「草木ノ末黒キ」（『言海』「すぐろ」の項）とところを発見し、そこで営まれている細々とした生活を思いやっているのではないか。外山高原や北上山地に住まう農山村の人々の姿が折り重なってくる。

それに対して、「孤光燈にめくるめ」く近代公園を整えた街の生活がある。明治時代、都市にあっては孤光燈の設置は近代化の象徴だった。辺境の地方都市である盛岡では、孤光燈が整備された公園にせよ街路にせよ、昭和に入ってもなお先進のなごりをとどめ、近代の香を放っていたはずである。

そこには、夕暮れのなかに青ざめて沈んでゆく農山村のこちらがわで、近代の灯しにみちびかれて美しく暮れゆく街の存在を、自覚的にとらえている詩人がいるのではないか。

自覚的とは、盛岡高等農林学校時代の憂愁の記憶をはるかに超えた地点に立つに至ったという意味である。それは、〈社会性〉を具えた視座に立つことであり、宮沢賢治における〈私的〉な記憶は詩の場を形成する詩層の底部に埋められて、その表層に現出したのは、小沢俊郎のいう「非私的に表現した」世界である。

貧しさから抜け出しようもない非近代的時空と、豊か

さが求められようとしている近代的時空との落差、あるいは格差を詩人は眼前にとらえている。そこには、「自伝性」から「共同性」・「社会性」へと向かって舵を切った、詩の場とそれを支える詩想の相当大胆な変節、転換があったとみてよい。そうした詩想の変質をよしとした詩人が、この段階で〈写〉の符号を与えたのであつたろう。

しかし、こうして詩想の深まりを達成したはずの詩人は、さらに手を入れてゆく。

〈写〉の符号を避けた[3]稿の形成が定稿清書の直前に近いかとみえるのは、それが定稿本文にほとんど同じであることとともに、最終詩句が書きさしのままに置かれているからである。そうであれば、定稿用紙を眼前にしながら、どうしてこうも突然、しかも十数年も前の、タピングという外国人親子との記憶を呼び起こし、詩の場の主役に組み込んだのか。

その契機は不明だが、その意図は明らかであると思われる。

この詩稿が「岩手公園」と命名された段階から、詩想の変質は起きている。その変質が、「自伝性」から「共同性」・「社会性」へと視座を移したことよってはかられた、拡充・深化という性質のものであつたことを前節でみたが、タピング親子は、その「岩手公園」がまわっている「共同性」・「社会性」を、さらに浮かびあがらせることによって詩想の深度を増すために、撰びと

られたと考えられるのである。

[2]稿がとらえた、非近代的時空と近代的時空との落差あるいは格差の意味を、詩人はあらためて見つめてゆくのだ。

盛岡城址が岩手公園として開園、一般に開放されたのは、〇六（明治三九）年九月一日。このとき、宮沢賢治は一〇歳である。前年は東北三県大凶作の年であり、新校本全集第十六卷下年譜の〇六年には、

三月 東北地方大飢饉。宮城・岩手・福島県の窮民を公営土木・耕地整理・植林事業・漁網製作などに就業させ救済をはかる

とあるが、その四月に始まった岩手公園の造営も県がおこなった「土木事業施行」による救済策であり、総工費2万1467円、労働者数は述べ2万2223人であつたという。近代市民の自由に憩う場として成立した岩手公園は、餓えに襲われた非近代に生きる人々の救済をも担った場なのである。

タピングが、辺境のこの地方にキリスト教の伝道のために入ったのが、〇七（明治四〇）年である。それから十年あまり妻ジュネヴィヴとともに、未開の地に文化や教育における近代化の礎を築く一翼を担いつづけてきた。そこに詩人が敬意さえいだいていたのは、ふたりの気品ある「老い」の指摘にうかがえるように思える。

そのように日本の辺境にあつてその近代化に尽くした異国の家族が、近代的公園として整備されてきた岩手公

園に憩うのだ。〈写稿〉がたどりついていたのは、まさにそこが近代空間そのものであることを強調する場ではないだろうか。

3

岩手公園に憩うタピング親子、その空間だけをとりだしてみよう。

「かなた」と老いしタピングは／杖をはるかにゆびさせど／大学生のタッピングは／口笛軽く吹き
にり
老いたるミセスタンピグ／「去年なが姉はこゝにして／中学生の一組に／花の名をこそをしへし
か」
孤光燈にめくるめき／羽虫の群のあつまりつ／川
と銀行木のみどり／まちはしづかに
』

安らかで静かな光景である。この場を核に定稿化に向かうわけであるが、

この詩は文語詩中の最高に位する優れた作品の一つであると思ひます。タピング一家の散策の叙景をこれ程如実に描写した手腕の影には矢張り彼独自の凝縮した鋭い眼が感ぜられます
という指摘をしていたのが吉本隆明であった。⁹⁾

「老い」た夫妻の物腰の優しさ、口笛を吹く青年の軽

やかさ。彼らをとりまいている時空は、燦めいている灯りとつややかに揺れている緑樹、そして涼やかにながれてくる川の風によつて満たされている。彼らには、ゆつたりとして豊かな精神と、それを支えうる生活がある。それが近代化のめざしている理想である。

こうしたタピング一家の登場によつて「岩手公園」は、たとえば、「ゆるぎない構図と豊かな色調によつて、美しいタブローとして見事に仕上げられた」一編としても受けとられてきた。けれども、その「手腕の影には矢張り彼独自の凝縮した鋭い眼が感ぜられ」という、吉本隆明の暗示に立ち止まらないではいられない。

かなた

東はるかに散乱の
さびしき銀は声もなし
なみなす丘はぼうぼうと
青きりんごのいろに暮れ
孤光燈にめくるめき
羽虫の群のあつまりつ
川と銀行木のみどり
まちはしづかに

岩手公園

その眼は、そのとき、公園から「かなた」と指示されたところ、こなた岩手公園に比べれば、「ぼうぼうと」して拡がる「さびしき」光景に向かつているのである。

それは、**1**稿にあった東の北上山地をみやる望遠の視点を復活させつつ、漠然としたかたちで提示された東北／岩手の風土とそこに営まれているもうひとつの生活空間だった。

その眼がとらえたところは、**①**稿段階に比べると、

その痕跡に農山村という非近代的な空間を示しているよう、ひとりそばだつ高洞山は／山火の痕をすぐろへり

という手前にあつた点景を詩の舞台から退場させ、詩の場に占める面積も四分の一に圧縮されている。この風土と生活に向けられた視線は、詩想としての強調法からいえば後退している。けれども、この後退は、詩想の衰弱を必ずしも意味しない。それが、ここではない「かなた」という認識を、**②**稿の**①**連が遠景から開始されたのと同じ位相で、やはり冒頭に置いて、こちらの世界とは隔絶した存在であるということが示唆されているのである。

ここ、夕暮れをめぐるめく岩手公園という象徴的近代空間からは、いわば切断されたところに、ぼうぼうと蒼ざめて暮れなずむ丘丘がある。集中する光と拡散する光とは、かたや点りつづけるものであり、かたや滅しゆくものである。それぞれを支配している静寂の感じは、そのまま時空の明と暗とを歴然とさせるのだ。

それは、明治以降のこの国の近代化がもたらした格差の構図そのものなのではないか。定稿は、ほぼそのままを継承するのである。

岩手公園

①「かなた」と老いシタピングは、／杖をはるかにゆびさせど、／東はるかに散乱の、／さびし

き銀は声もなし。

②なみなす丘はぼうぼうと、／青きりんごの色に暮れ、／大学生のタピングは、／口笛軽く吹きにけり。

③老いたるミセスタッピング、／「去年なが姉はこゝにして、／中学生の一組に、／花のことはを教へしか。」

④孤光燈にめくるめき、／羽虫の群のあつまりつ、／川と銀行木のみどり、／まちはしづかにたそがるゝ。

しかし、ここ、岩手公園が、大凶作による窮民対策として誕生したという事実をやはり見過ごしてはならないだろう。岩手公園という小さな近代空間の基底にはこの地方の飢饉の風土というはるかな時空が蔽にあり、その底部とつながった先に露出しているのが、「ぼうぼうと」して「さびしき」「かなた」の景なのである。

タピングがそのような意識をもって指し示した、といいたいのではない。むしろ夕陽に照らされた山景に心が動いた異邦人の、何気ない仕種として無難に提示されたところに、すでに**②**稿における風景そのものの対比による現実認識にとどまらない詩想の蠢きが秘匿されているように思えてならない。

タピング一家の登場は、「岩手公園」という時空の近代性の証明であるとともに、小さなその近代空間が踏み

しめている非近代的空間の広がり眼を向けさせる無意識な契機として仕組まれていると考えてはならないか。その命名に固執した詩人がたどりついたのは、格差を拡げてゆくこの国の近代化の一端を、タビング家族の登場によって指し示そうと詩人はしている、そのような詩想を秘めているのではないか、ということなのである。

5

「岩手公園」は〈写稿〉段階からその命名を継承しつづけた詩稿である。だが、詩の場の変容は、その振幅を激しくしていた。そこでは、詩想の大きな転換というがあった。〈自伝性〉をその詩層のなかに沈めることで、詩想は〈共同性〉・〈社会性〉の視座に立ち、農山村と都市という風景の対置を果たした。そのうえで、異邦人を舞台にあげて岩手公園の近代性を強調して、飢饉の風土を「かなた」へと追いやるのである。

自伝詩篇から風土詩篇へ、そして都市の生活詩篇へ、さらにはそれらを踏まえた社会詩篇へ。詩人の眼は、まずは岩手公園の、この地方では突出した近代性のほうに集中した。この街で、宮沢賢治自身最先端の農学（農芸化学）を学び、あるいは青春期の悩みを抱えてこの公園を彷徨したときもあった。

ただ、ここを拠点に地質踏査に向かつて、この地方の非近代的な風土にも接することができた。近代化の恩恵に浴した自らの体験があつて、詩人宮沢賢治の生涯のゆ

えが定まっていたのはまちがいあるまい。

読み解いてきたとおり、ふたつの詩稿ともに、近代的時空と非近代的時空との、文字どおりその落差によって場面を構成するという詩の場にたどりついているのであつた。そのときそこでは、非近代的時空を近代的空間からとらえられている、ということが要点であるのかもしれない。

けれども、この街で得たところのものをもって、非近代的時空の変革に挑んできたにもかかわらず、現実にはどれほどのことも果たせていないという事実がある。詩の場にただよう調子のひとつは未達感ではないのか。たとえば、「かなた」における詩人のまなざしは、タビングの充足したまなざしの陰で、実は無力である。

社舎農村を最後の目標として／只猛進せよ

（雨ニモマケズ手帳）

という覚悟を承けた再編段階以後の詩人の、拠つて立つ基軸は確かに非近代的時空のがわにあるのだが、〈詩的実践〉というかたちでしかそこに立ち得ないという、その境界を自覚してもいたはずなのである。

田園詩篇のなかで、そして生活詩篇のなかで、この国の近代化のありようを批判的に問い、その〈社会性〉を色濃くにじませてゆく過程には、詩人宮沢賢治のこの〈詩的実践〉に懸ける最後の熱情が深く、そして静かにこめられようとしている、とみるのである。

(注)

1 宮沢賢治のテクストは『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房）により、以下新校本全集と略示する。なお本稿は、島田『文語詩稿叙説』（朝文社二〇〇五）の第3章（写稿）論で、下書稿三に「岩手公園」という題名が与えられていないという錯誤のままに分析をおこなったのを改訂するもので、広島大学に提出した『文語詩集の成立―鉛筆・赤インク「写稿」の過程』（二〇一〇http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00032003）に組みこんだものだが、若干手直しをしている。

2 諸家にこの指摘があるが、島田も「《文語詩双四聯》の成立」（『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学編）』第28巻一九九四・一二）で、『校本宮澤賢治全集』をテキストに、『文語詩稿』が定型に至る過程の詩形変化を分析して、詩形の圧縮に向かう大きな流れがあることを確認した。

3 夫妻は〇七年から一九九年まで盛岡に滞在（新校本全集第十六巻年譜）、Henry・Topping は盛岡バプテリスト教会牧師として、夫人 Genevieve は教会附属の盛岡幼稚園創立者として活躍（岩手公園詩碑）。宮沢賢治が〇九（明治四二）年盛岡中学一年の一学期までヘンリーは英語教師としていたし、一五（大正四）年高農一年のときには聖書講座を聴講したという（新宮澤賢治語彙辞典）。

また、盛岡幼稚園は〇九年設立認可、岩手県最初の幼稚園である。子供にニューヨーク生の姉 Helen、東京生の弟 Willard があつた。Helen については、吉田敏二が小林功芳論

（「タツピングの家の人々」、『日本英学史学会』21号）

によつて「盛岡中学で英語を教へて」といたとし、中学の英語教諭長岡拓が「英会話の練習のためヘレンを招いて、学生たちと岩手公園に行きその間絶対に日本語を使わせなかつたという話」を紹介しているというが（『岩手公園』鑑賞、「宮沢賢治文語詩の森」所収）、未詳、Willard は父同様日本で宣教師として活動した。

4 新校本全集第七巻校異に、「歌稿〔A〕〔B〕」の「大正七年五月より」という制作期の見出しによる歌群のうち652〜656番歌について指摘がある。たとえば、

暮れざるに／けはしき雲のしたに立ち／白みいらだつ／アーク燈かな。（653）

などといったもの。注3の吉田論は「下書稿二までは、短歌の「険しきいらだち」が主調であつた」とする。

5 『文語詩稿』の初期段階では、自らの過去の事件を文語という変換装置によつて再点検する、自分史精査がひとつの目的であつたという仮説をもっている。『文語詩稿叙説』第1章初期論の1節「前」論／その発生、を参照されたい。

6 小沢俊郎「疾中」と『文語詩』一（『宮沢賢治論集3』所収有精堂一九八七）が次のように指摘していた。

私的体験を非私的に表現した（『文語詩』）の中に、読者は賢治のいない賢治の生涯を読みとることができる。作者からいえば、他を描くことが同時に自分を描くことであつた。

7 山火が本文に現われてくるのは下書稿一開始形に、

「高洞山の焼け痕は／「？・↓・」 蕁菜にこそ似たりけり」

とあるところからである。つまり、当初から詩人には人々の営みが見えてはいたのだ。けれども、「わが」ことのほうが初期稿では課題だったということである。「山火」を題名とした口語稿に、『春と修羅第二集』の四六番稿（一九二四、四、六、）と八六番稿（二四、五、四、）がある。四六番稿については、栗原敦「（加害）の影を―「山火」再読」（『宮沢賢治透明な軌道の上から』所収新宿書房一九九二）に分析と考察がある。氏は、

作品の初発の時、作者宮沢賢治は、自分が加害者の位置に押し上げられるような思いで「坎坷な」「村人たち」「山の部落の人たち」を見つめた。（中略）けれども、その後の生涯の苦しい営みの末に、最晩年に近く、定稿として整理を果す際には、ついに現実を現実としてたじろぐことなく厳しく受けとめて示す境位にたどりついたのであった。

と論をしめくくっている。山火という現象をとおして、農山村に生きる人々の苦悩を口語稿でも詩人は見つめているのである。八六番稿のほうは、やはり夕暮れに、眼前に広がる田園の風物を、思い出したように山火を遠く見つめては、克明にスケッチしている。人々への関心は、山火が「あつちもこつちも燃えてるらしい」と気づいたとき、「古代神楽を伝へたり／古風に公事くじをしたりする／大償つぐなや八木巻やままきの／小さな森林消防隊」を想起するあたりに現われている。

8 『昭和九年岩手県凶作誌』（岩手県一九三七）に、過去の大凶作を振り返る「明治三十五年及三十八年凶作概説」があつて、その「第二節明治三十八年」の「救済施設」に「土木事業施行」の項があり、次の記述がある（傍線島田）。

土木事業は多羅災民の使役に依り最も多く救済の効果を挙げ得べきに鑑み、三十九年度分の県債償還を繰り延べ之に通常予算より三万円を編入し合計十一万一千七百五十三円を以て国県道修繕其の他の土木事業を起し、別に生業扶助費より七千円を補助して岩手公園を築設し、九千円を砂利採取に、六百余円を招魂社移転費に支出した。『岩手県史年表』の公園開園にかかわる記事に「救済」の語はないが、たとえば『岩手県の百年』（山川出版社一九九五）の年表には「凶作対策事業で岩手公園開園」と指摘がある。なお造営経費等の指摘は一般向けパンフレット「岩手公園ものがたり」（櫻山神社二〇〇五）に示されているところから引いた。

9 「孤独と風童」（未発表一九四五）。『初期ノート』（光文社文庫版二〇〇六）によつた。

10 須田浅一郎「文語詩「岩手公園」の生い立ち」（『宮沢賢治に酔う幸福』日本図書刊行会一九九八）。